

上田秋成の晩年

岡本かの子

青空文庫

文化三年の春、全く孤独になつた七十三の翁^{おきな}、上田秋成は京都南禅寺内の元の庵^{あんきよ}居の跡に間に合せの小庵を作つて、老残の身を投げ込んだ。

孤独と云つても、このくらゐ徹底した孤独はなかつた。七年前三十八年連れ添つた妻の瑚璉^{これんに}尼と死に別れてから身内のものは一人も無かつた。友だちや門弟もすこしはあつたが、表では体裁のいいつきあひはするものの、心は許せなかつた。それさへ近来は一人も来なくなつた。いくらからかひ半分にこの皮肉で頑固なおやぢを味^{あじわ}ひに来る連中でも、ほとんど盲目に近くなつたおいぼれをいぢるのは骨も折れ、またあまり殺^{せつしやう}生^{せい}にも思へるからであらう。秋成自身も命数のあまる処を觀念して、すっかり投げた氣持になつてしまつた。文化五年死の前の年の執筆になる胆大小心録の中にかう書いてゐる。

もう何も出来ぬ故^{ゆゑ}、煎茶^{せんちや}を呑んで死をきはめてゐる事ぢや——

小庵を作るときにも人間の住宅に対する最後の理想はあつた。それはわづか八畳の家でよかつた。その八畳のなかの四畳を起き臥^ふしの場所にして、左右二畳づつに生活の道具を置く。机は東側の牖^{まど}下^{した}に持つて行き、そばに炉を切り、まはりの置きもの棚に米醬油^{しやうゆ}など一切飲み食ひの品をまとめて置く。西の端の一畳分の上に梅花の紙帳を釣り下げ、そ

の中に布団から、脱ぎ捨てた着物やらを抛り込んで置く。夏の暑さのために縁の外の葦あしだ竹け、冬の嵐氣らんきを防ぐために壁の外に積む柴薪さいしん——人間が最少限の経費で営み得られる便利で実質的な快適生活を老年の秋成はこまごまと考へて居た。しかし、その程度の費用さへ彼は弁じ兼ねた。やむを得ず建てたところのものは、まったく話にもならぬほんの間に合せの小屋に過ぎなかつた。彼は投げた氣持の中にも怒りを催さないでは居られなかつた。——七十年も生きた末がこれか、と。しかし、すぐにその怒りを宥なだめて掌てのひらの中に転ころばして見る、やぶれかぶれの風流氣が彼の心の一隅から頭を擡もたげた。彼は僅わずかばかりの荷物のなかを搔かき廻して、よれた麻の垂簾すいれんを探し出した。垂簾には潤うるひのある字で『鶉居うずらい』と書いてあつた。彼はその垂簾の皺しわをのばして、小屋の軒にかけた。

彼は十七八年前、五十五歳のときに家族と長柄川ながらのそばに住んで居たことがあつた。長柄の浜松がかすかに眺められ、隣の神社の森の蔭になつてゐて氣に入つた住家だつた。彼はその時、家族を背負つたまま十数度も京摂の間に転宅して廻つたので、住家の安定といふことには自信が無くなつてゐた。自信を失ひながらなほ安定した氣持になりたかつたので、その垂簾を軒にかけたのだつた。『鶉居うずらい』と書いたのは鶉は常居うずくなし、といふいひ慣ならわしから思ひついた庵号あんごうだつた。

さうした字のある垂簾をかけた小さい自分の家を外へ出て顧みると、世界にたつた一つ住み当てた自分の家といふ氣がして、そのとき、もはや老年にいりかけて居た彼は、こどものやうになつて悦んだ。しかし、その喜びも大して長く続かず、六年目には垂簾を巻いて京都へ転居したのをきつかけに、再び住居の転々は始つた。

垂簾はかなりよごれてゐた。秋成は長柄の住家ではじめてそれをかけたと同じやうに外へ出て眺め返してみた。小庵は新しいので垂簾のよごれは目立つた。彼は住居に対する執し

著の亡霊がまだ顔をさらしてゐるやうで輕蔑けいべつしたくなつた。しかし、いくら運命が転居させたがつても、もうさうはおれの寿命は続かなからう。今度こそはおれは一つの家に住み切つてしまふのだ。さう思ふと痛快な氣がして〓〓ざま見い。と彼は垂簾に向つて云つた。そしてその氣持を妻の瑚璉尼に話したくなつた。〓〓瑚璉よ。いまだけでいい。ちよつと話し相手に墓場から出て来んかい。

彼はもしこの小屋なら妻はいつも其処そこに起き暮しするだらうと思ふ、小箱程の次の間に
向つて壁越しに云つた。あとは笑ひにまぎらした。

紙袋からぼろぼろと焼米を鉢にあけて、秋成はそれに湯を注いだ。そこにあつた安永五年刊の雨月物語を取つて鉢の蓋にした。この奇怪に優婉な物語は、彼が明和五年三十五歳のときに書いたものである。書いてから本になるまで八年の月日がかかつてゐる。推敲に推敲を重ねた上、出版にもさうたう苦勞が籠つてゐた。顧みると国文学者の分子の方が勝つてしまつた彼の生涯の中で、却て生れつき豊であつたと思はれる、物語作者の伎倆を現したのは僅かに過ぎない。その僅かの著作のうちで、この冊子は代表作であるだけに他の著作は散逸させてしまつても、これには愛惜の念が残り、晩年になるほど手もとに引つけて置いた。それかと云つてさほど大事にして仕舞つて置くといふこともなかつた。運命に馬鹿にされ、引ずり廻されたやうな一生の中で、自分の好みや天分が何になつたか。なまじそれがあつた為に毛をさか挽ぎにされるやうなくなるしい目にあつたと思へば、感興に殉じた小伎倆立てが、自分ながらいましく、この冊子を見る度にをこな自分を版木に刷り、恥ぢづら搔いて居るやうで、踏まば踏め、蹴らば蹴れ、と手から抛つて置くところまかせ、そこら畳の上に捨てても置いた。この冊子が世間で評判のよかつたことにも何といふことなしに反感が持てた。要するに愛憎二つながらかかつてゐる冊子であるため、ついそばに置いて居るといふのが本当のところかも知れない。土瓶敷代りにもたびたび使

つた。鍋なべや土瓶しりの尻しりしみが表紙や裏に残月形に重つて染みついてゐた。

湯気で裏表紙が丸くしめり脹ふくらんだ蓋ふたの本をわきへはねて、鉢はちの中にほどよく膨ふくれた焼米を小さい飯茶碗めしちやわんに取分け、白湯さゆをかけて生味噌なまみそを菜さいにしながら、秋成はさつさと夕飯をしまつた。身体は大きくないが、骨組はがつちりしてゐて、顎あごや頬骨ほおほねの張つてゐるあばた面づらの老人が、老いさらばひ、夕闇に一人で飯を喰べて居る姿はさびしかつた。とぼけたやうな眼と眼が、人並より間を置いて顔についてゐるのが、蛙かえるのやうに見える。

箸はしを箸箱に仕舞しまひながら、彼はとおさうちやと気がついて、部屋の間からざるで伏せてあつた小鍋を持つて来て箸を突込み、まづさうに食ひ始めた。鍋にはどぜうが白つぽく煮てあつた。彼はこれを喰べるとき、神経質に窓や裏口を睨にらんだ。五十七歳で左眼をつぶして仕舞ひ、六十五歳でその左の眼がいくらか治つたかと思ふと、今度は右の眼が見えなくなつた。それから死を待つ今日まで眼の苦勞は絶えなかつた。

どぜうがよろしいと勧める人があるので食ひ続けて居るのを、一度わからずやの僧侶に見つかつて、人間は板齒はくしで野菜穀こくもつを食ふやうに出来てゐる。どぜうなど食ふは殺せつしよ生うのみか理はさずに外れてゐる。とたしなめられ、その場は養生喰ひだと、抗弁はしたものの、その後は、食ふたびに気がさした。死ぬのに眼などはもうどうでもよろしいではないかと

思ひつつも養生はやめられなかつた。

小さいとき驚癪でしばしばなやまされながらも、神経の強い彼はときどき妄想性にかかつた。狐狸こりの仕業はかならずあるものと信じて居た。内心忸怩じくじとしながらかうやつてどぜうの骨をしやぶつてゐるときには、あの忠告した坊主がほんたうは自分も食ひ度たいのだがそれが食へぬので、あんな嫌がらせをいつたので、それを押して食つて居る自分を嗅かぎつけたら、うらやましくなつて、何か化性になつて現れて来るやうな気がした。事実その姿は変に薄つぺらな影絵となつて障子しょうじの紙から抜けたり吸ひ込まれたりするのを彼は感じた。すると彼はいつそ大胆になつて、わざと大ぴらにどぜうを食つて見せるのだつた。それで影絵が消えて仕舞ふと、彼は勝利を感じて箸をしまった。南禅寺の本堂で、卸戸おろしどをおろす音がとどろいた。その間に帚ほうきで掃くやうな木枯こがらしの音が北や西に聞えた。彼は行燈あんどんをつけてから、煎茶せんちゃの道具を取り出した。

彼は後世、煎茶道の中興の祖と仰がれるだけにこの齡になつても、この道には執著を持つた。むしろ他の道楽を一つ一つ切り捨てて行つて、たつた一つを捨て切れず、残した好みであるだけに全身的なものがあつた。「茶は高貴の人に応接するが如し、烹点ほうてん共に法を濫みだれば其悔そのかへるべからず」これが、彼の茶に対するときの心構へであつた。それで、

茶具の数も、定めの方の二十具を減して十六にし、また、十二具にし、やぶれた都籠から取出したのはぎりぎり間に合せの茶瓶、茶盞、茶罌ぐらゐの数に過ぎなかった。けれど、煎茶の態度は正しかった。生活は老貧のくづすまに任せただけ、そのなかにただ一筋、格をくづさぬものを、踏みとどめ残して置きたいといふのが、老人の最後の自尊心だった。彼は、湯鑊に新しく水をいれて来て火鉢に炭をつぎ添へてかけた。彼は水にやかましかった。近所の井戸のものには腥気があるとか、鹹気があるとかいつて用ひなかつた。わざわざ遠くの一途の上の井戸から人を雇つて甕に汲みいれさせた。

京撰の間では、宇治の橋本の川水が絶品だと云つて、身体のためなうちは、水筒を肩にかけ一日仕事でよく汲みに行つた。それらの水を貯へた甕は夕方から庭に持ち出して蓋をとり、紗帛で甕の口を覆ひ、夜天に晒した。かうすると、水は星露の氣を承けて、液体中の英靈を散らさないと、彼は信じて居た。何でも事物の精髓を味ふことには、彼はどんな嗜慾を持つて居た。

彼はゆつたりと坐つて作法のやうに受汚で茶盞を拭ひ、茶瓶の蓋を開けて中を吟味し、分茶盒と茶罌を膝元に引付けた。そして湯の沸くのを待った。彼は幼時、いのちにかかはるほどの疱瘡をして、右の手の中指は小指ほどに短かつた。左の手の人差指も短かつた。

さういふ不具の手を慣して器物を扱つてゐるので、一応は何気なく見えるが、よく見ると手首は器物に獅^し噛^がみついてゐた。まるで餓鬼^{がき}の執著^{しやく}ぢや。彼はわざといやなものを自分に見せつけるいこちな習癖^{しふ}がここに起るときに、その手首を眼の前でひねくつて、ひとりくつくつと笑つた。さういふ手で筆^{ふで}を執^とるのだから、どうせろくな字を書けつこないと自分を貶^{けな}し切り、人がどんなに出来栄^ばえを褒^ほめても決して受け容れなかつた。

火鉢^{ひばち}にかけた湯罐^{とうかん}の湯水^{とうすい}が、やうやく暖まつて来て、微々^{ゐゐ}の音を立てるやうになつた。

秋成は、膝^{ひざ}に手を置いて、そより、とも動かなかつた。ただ湯の沸^わくのを待つだけが望みであるこの森厳^{きんげん}で気易^{きやす}い時間に身を任せた。木^こ枯^{がらし}が小屋^{こや}を横^{よこ}に掠^{かす}め、また真上^{まへ}から吹き圧^{おさ}へる重圧^{じゅうあつ}を、老人^{らうじん}の乾^{かわ}いて汚斑^{しみ}の多い皮膚^{ひふ}に感じてゐた。

永^{とこ}い年月^{げんげつ}工夫^{くふう}したかういふ境地^{きんぢ}に應^おずべき氣^きの持ちやうが自然^{しぜん}と脱却^{だつじやく}して、いまは努^とめなくても彼の形^{かたち}に備^{そな}つてゐた。それは「静^{しず}にして寂^{さむ}しからず」といふこつであつた。

湯^ゆが沸^わいて「四辺^{しへん}泉^{せん}の湧^わくが如^{ごと}く」「珠^{たま}を連^つぬるが如^{ごと}く」になつた。もうすこしすると「騰波^{とうは}鼓浪^{ころう}の節^{ふし}に入り、ここに至^{いた}つて水の性^{しやう}消^{しょう}え即^{すなわ}ち茶^{ちや}を煮^ゆべき」湯候^{ゆぐう}なのである。秋成には期待^{きたい}の氣持^{きぢ}が起^おつて熱^{あつ}いものが身体^{からだ}を伝^{つた}つて胸^{むね}につき上げて来るのを覺^{おぼ}えた。それが茶^{ちや}に対する風雅^{ふうや}な熱意^{ねつい}ばかりであるのかと思ふと、さうではなく、それに芽生^{めば}えたいらしい

ろな俗情が頭を擡もたげて来るのであつた。

青年時代の俳諧はいかい三昧さんまい、それをもしこの年まで続けて居たとすれば、今日の淡々如きにかうまで威張いばらして置くものではない。淡々奴根めが材木屋のむすこだけあつて、商才を弟子集めの上に働はたらかして、門下三千と称してゐる。これがまづ、いまいましい。四十の手習ひで始めた国学もわれながら学問の性はいいのだが、とにかく鬭争に氣を取られ、まとまつた研究をして置かなかつたのが次に口惜くやしい。俺を、学問に私すると云つた江戸の村田春海はるみ、古学を鼻にかける伊勢の本居宣長もとおりのりなが、いづれも敵として好敵ではなかつた。筆論をしても負けさうになればいつでも向ふを向いて仕舞しまふぬらくした氣色の悪い敵であつた。これに向ふにはつい嘲ちやうしやう笑や皮肉が先きに立つので世間からは、あらぬ心事を疑はれもした。人間性の自然から、独創力から、純粹のかんから、物事の筋目を見つけて行かうとする自分のやり方がいかに旧套きゆうとうに捉とらはれ、銜学げんがくにまなこが眩くらんでゐる世間に容れられないかを、ことごとく悟つた。

和歌については、小沢蘆庵おざわろあんのことが胸に浮んだ。一方では、堂上風の口たるい小細工歌が流行はやり、一方では古学派のわざとらしい万葉調の真似手の多いなかに、敢然かんぜん立つて常情平述主義を唱へ「ただ言歌ことうた」の旗印を高く掲げた才一方の年上の老友がうらやまれた。

自分に、若し、もう少し和歌の志が篤く、愚直の性分があつたら、あの流儀は自分がやりさうなことであつた。その「ただ言歌」の心要として蘆庵の詠んだ、

言の葉は人の心の声なれば

思ひを述ぶるほかなかりけり。

といふ歌などは「雨降るわ、傘持てけ」のたぐひで歌とも何とも云ひやうのないものだが、なぜかそれが、歌を詠まうとするときには、必ず先きに念頭に浮んで詠みはづまうとする言葉の出頭を抑へ、秋成をいましがらせた。

野暮な常識臭いものを固く執つて動かない蘆庵の頑迷不遜が彼の感興を醒した。そしてまた歌はいくらやつても蘆庵が先きに掻き廻して居るといふ感じが強かつた。蘆庵といふ男は始め天下一の剣士になるつもりで、それが適ひさうもなくなつたので、歌に変つたのだといふほどあつて、とても一徹なところがあり、四十年近くも地虫のやうに岡崎に棲みつき、二本の庭の松を相手に、歌のことばかり考へて居た。自分がはじめて彼を訪ねたときには、もてなしだと云つて、武骨な腕で、琴をひいて聴かせたものだ。そのまじめくさつた歌にはをかしくて堪へられなかつたが、無理に我慢して歌詠み仲間の礼儀に歌の遣り取りをしたものだつた。だが深切気のあるおやちで、自分ののらくらして居るのを見兼ね

て、せめて弟子取りでもしろと、勧めて呉れた。自分はおもふさまなことを云つてそれをはねつけ、あの律儀なおやぢに、溜息ためいきを吐かせた。

大雅たいが、応挙おうきよ、月溪げつけいなどといふ画人が、急に世にときめき出したのも、癩しやくに触つた。

彼等の貧乏時代は、茶屋の掛行燈かけあんどんなど引受け、がむしやらに雑用ぞうよう稼うぎをして、見られただきまではなかつたのを、この頃はすっかり高くとまり、方外の画料むさぼを貪むさぼる。中にも月溪とは、智恩院の前の住ひでは、すぐ近所合ひであり、東洞院では同じ長屋住ひで味噌醬みそしょう油ゆの借り貸し、妻の瑚璉こけん尼が飲める口であつたので、彼はよい飲み友達にして湯豆腐たうとうづくめの酒盛りなど、度々したものだつた。その頃からこの画描きは、食ひ道楽、飲み道楽、その上にもう一つの道楽もあつたのを、出世したから堪たまらない。すっかり身体をこはし、せん頃久しぶりに見舞つたら、樽詰たるづめの不如法のさらし者を見るやうに衰弱して居た。しかも、それで居ながら酒さかなの肴さかなは豆腐か、つくしにかぎるなどと、まだ食氣のことを云つて居た。岸駒が俗慾おほの奢おごりを極め、贅ぜい沢たくな普請せんをして同功館などと大そうもない名をつけたのも癩に触つた。絵は、書典と功が同じである、それで画屋は同功館であるといふいはれださうだ。変なつけ上り方をすればするものだ。

かういふ不平を続けて込み上らせて来ると秋成は、骨格の太さに似合はず少量な血が程

よく身体を循環して、ぽつと心に春めくものを覚えるのだった。眼^{がん}瞼^{けん}がびくびく痙攣^{けいれん}するののも一つの張合ひになつて来た。湯罐の湯はすっかり沸き切つて、むやみにぐらぐらひつくりかへつてゐるが彼はかまはなかつた。それよりもこの場合、肉体的に何か鋭い刺^し戟^{げき}を受けて興奮した、いまの氣持を照応せしめたかつた。そこで湯罐の熱い膚^{はだ}に指の先きを突きつけた。痛熱い触覚が、やや痺^{しび}れてゐる左の手の指先きに噛^かみつくと、いはうやう無い快感が興奮した神経と咄嗟^{とつさ}に結びつき、身体中がせいせいと明るくされるやうである。彼はこの分ならまだ五六年は生き堪へられるぞと、心中で呼ぶのだった。彼は左の手の中で一本湯罐の胴に触らないで痺れたままの感覚で取残されてゐる例の疱瘡^{ほうそう}で短くなつてゐた人差指をも、公平にこの快味に浴させようと、他の四本の指を握り除け、片輪な指だけ、湯罐の胴にざりりと押つけた。甘美な疼痛^{とうつう}がこの指をも見舞つた。いつその指を火にくべて、われとわが生命の焼ける臭^かひを嗅いだらどれほどこころゆくことだらう。

氣持が豪爽^{べいそう}になつて来るとまだまだ永く生きられさうな氣がし出した。むしろ、これからだといふ氣さへし出した。ⅡⅡ人間はいつまでたつても十七八の氣持は残つてゐる、と若いたいこ持ち茶人の宗了といふ男が、自分に体験もないくせに、誰に聴いたものか、かう云つたのを覚えて居る。その若いたいこ持ち茶人の宗了だが、彼が茶番をして、千鳥

の役を引受けて酒席へ出たことがあつた。美男のうへ、念入りの化粧をしたので、芸子女中まで見惚みとれるくらゐだつた。ところがその顔の額ひたいへもつていつて彼は「千鳥」と太文字で書き入れた。それから右の頬ほおづらへ師匠の宗佐の名を鑑定の印の形に似せて朱で書き入れた。この趣向は飛抜けて奇抜だつたので、たちまち京けい阪はんの遊び仲間の評判になつた。当時その酒席に居た秋成は、宗了のこの働きを眼の前に見て、これがほんたうの若さから来る即興といふものではないかと感じたことであつた。どう思ひ切つても秋成自身には、この芸は出来さうもなかつた。宗了の美男と、若さ、がうらやまれた。

さて、秋成自身ふり返つて見るのに、自分の肉体には若いうちから老いが蝕むしばんでゐて、思ひ切つた若さも燃えさからなかつた。だが、わが身のうちに蝕むしばんだこの若い頃からの老いが、その代り自分のなかにある不思議な情緒を、この七十の齢まで包みかばひ保たしてゐるのかも知れない。うつし世のうつしごとの上では満足出来ず、さればとて死を越えては、いよいよ便りを得さうも無い欲情——わづかにそれを紙筆の上に夢にのみ描いて、そのあとを形にとどめて来た。それは現実の自分の上では、身体でつきとめようとすれば、ここに遁のがれ、ここで押へようとすれば身体に籠こもる。雨晴れて月朦朧おぼろの夜にちび筆の軸を伝つてのみ、そのじくじくした欲情のしたたりを紙にとどめ得た。『雨月』『春雨はるさめ』

の二草紙はいはばその欲情の血膿ちゅうみぬぐを拭つたあとの故紙こしだ。しかし肉漿にくしょうや膿血むさほは拭ひ得てもその欲情の難くるしみのしんは残つてゐる。この老いにしてなほ触るれば物を貪むさほり恋ふるころのたちまち鎌首かまくびをもたげて来るのに驚かれた。そして、貪り恋ふる目標物の標ひょうぶとして捕捉し難いものにも自分乍ながら驚かれた。

それは正体が無く、不思議なしわざだけする妖怪によく似てゐた。霽はれかかつた朝霧の中に冴さえだけ見せてゐる色の無い虹にじのやうにも覗のぞかれた。

老いを忘れる為に思ひ出に耽ふけるとは卑怯ひきような振舞ひとして、秋成はかねがね自分を警めてゐた。過ぐ世をも顧りみない、行く末も氣にかけない。ただ有り合ふ世あてはだけに当嵌あてはめて、その場その場に身を生すことを考へて来た——事実、恋ふべき過去でも無い、信じられる未来とも思へなかつた、業風ごうふうの吹くままに遊び散らし、書き散らし、生き散らして来たと思へる生涯が、なぜか今宵は警めなしに顧りみられる。そして、そろそろ、まんさんたる自分の生涯の中に一筋貫くものがあるのに氣が付き出した。これを、今すこし仔細しさいに追及し、検討して見るとしても、あながち卑怯未練と自己嫌惡に陥るにもあたるまい——否、何かしらず、却かえつて特別に自分に与へられた道の究明といふやうなけ高い、氣持さへ感じられもして来るのだつた。

秋成は湯罐ふたの蓋をとつて見た。煮くたらかされて疲れ果て、液体のまん中を脊せのやうに盛り上げて呻しん吟ぎんしてゐる湯を覗のぞいて眉まゆを皺しわめた。物思ひに耽ふけつて居るうちに茶の湯が煮え過ぎて仕舞しまつてゐた。秋成は、立ち上つて覺おぼ束つかない眼で斜めに足の踏み先きを見定めながら簷のき下したへ湯罐の水を替へに行つた。疝腫で重い腰が、彼にびつこを引かせた。

燠おきのたつた火を、その儘ままにして彼は、湯罐を再びその上へかけた。彼はもう茶を入れて飲む方の興味は失つて居たが、水が湯になるあの過程の微妙な音のひびきは続けて置きたかつた。突き詰めて行くところを程よく牽けん制せいしてなめらかに流して呉くれる伴奏であるやうに思へた。彼は耳を傾けたが、風はもう吹きやんで、外はびりびりする寒さが、寺の堂も山門も林をも、腰から下だけ痺しびらせつつあるのを感じた。――京は薄情な寒さぢや。と彼はここでひと言、ひとりごとをいつた。彼は元通りきちんと坐すわつて、考への緒いと口ぐちに前の考への糸いと尻じりを結びつけた。――愛しても得られず、憎んでも得られず、勝負によつて得られず、ただ物事を突きつめて行く執念のねばりにだけ、その欲情は充みたされたのだつた。だが、この世の中にそれほど打ち込んで行けるほどのものがあるだらうか。いくら執念のねばりを愛する欲情であるといつて、むやみに物を追ひ、獅し噛がみついて行くわけには行かなかつた。魅力といふものが必要だつた。そして魅力の強いものほど飽きが来た。飽きが

来なければ、むかうが変った。

生母には四つの歳に死に訣わかれた。曾根崎の茶屋の娘だった。場所柄美しくない女ではなかつたらうけれども、誰も父の名を明かして呉くれないところから考へると、いづれは公おおやけに難い関係から生れた自分だらう。物どころついてそこに父と呼び母と呼ぶところの人があるのに気がつく時分にはもう堂島の上田の家に引取られて居た。上田氏が自分の何に当るか訊きく気はなかつた。訊けば嘘をつかれるだらうと判つてゐた。同じ嘘なら現在すうきむやみに可愛がつて呉れる上田夫妻を、父と呼び、母と呼ぶ嘘の方が、堪へられた。彼の数奇な運命は幼年の彼に、こんなませた考へをもたせた。

二度目の母である上田の妻も自分を愛したが二三年を数へただけで死んだ。母といふものはたいがい早く死ぬものと、こども心にきめて何とも思はなかつた。ところが、上田氏の迎へた後妻で、自分に三度目の母になる女は、長生きした。彼女は秋成が六十近い年齢になるまで生きて妻と一しよに自分が引脊ひきせお負つて歩いた女である。その女も母として自分を可愛がつた。それで秋成の若いうち、世間はあなたはふしあはせのやうでも仕合せな方、二人もおふくろさんを代へて、しかもどのまま母もまま母のやうでない方、と言つた。だが、今考へるのにそれもよしあしだ。まま母が、まま母らしくむごたらしくして呉くれたら、

一筋に生みの母への追慕は透^{とお}つて生涯の一念は散らされずに形を整へてゐて呉れたかも知れない。それをなまじひ、わきからさし湯のやうに二人までの愛を割り込ませ、けつきよく自分の生母へのあこがれを生ぬるいものにして仕舞^{しま}つた。をかしなことは自分が母親をなつかしむとき、屹^{きつと}度、三人の女の面影が胸に浮び、若い生母の想像の倂^{おもかげ}から老いた最後の養母まで、ずらりと面影を並べて、自分の思ひ出を独占しようと競ひ合ふ。自分は遠慮して、そのどれへも追慕のこころを専^{もっぱ}らにするのを控へるのだつた。

かくべつすぐれたところの無い養母たちにも心から頭を下げたことが二度あつた。一度は、後のまま母の生きて居るうち、自分の五十五の年であつた。中年で習つて、折角はやりかけた医術も、過労のため押し切れなく成り、それで儲^{もう}けて建てた、かなり立派な家も人手に渡し、田舎^{いなか}へ引込んだ年であつた。そのときは妻の母も一緒に仕舞つたので、狭い田舎の家に二人の老婆がむさくるしく、ごたごた住まねばならなかつた。もとは大阪堂島の、相当戸前も張つて居る商家のお家はんであつたのを、秋成がその店を引受けてから急に左り前になつたその衰運をまともにつきあひ、わびしいめに堪へながら、秋成がやつとありついた医業にいくらか栄えが来て、樂隱^{らくいん}居^{きよ}にして貰^{もら}つたところで、また、がたと貧乏^{ずまい}住居^おに墮^おちたのだつた。だから秋成にしてみれば、まま母に、何とも氣の毒でし

やうが無かつた。そこで、五十五の男が母の前に額ぬかをつけ、不孝、この上なしと、詫わびたのだつた。すると、まゝ母は「何としやうもない事だ。」と返事して呉くれた。ものを諦める、といふほど積極的に氣を働かす女でなく、いつもその儘まま、その儘のところ自分に自分を當て嵌はめた生活を、ひとりでにするたちの女だつた。けれども、この母のこの返事は、可成かなり秋成に世の中を住みよくさして呉くれた。この母と妻の母と、もう五十に手のとゞきさうな妻と、三人の老婆ろうけいが、老鷄なすなのやうに無意識に連れ立つて、長柄の川べりへ薺なすななど摘みに行つた。

かういふ氣易きやすさを見て、暮しの方に安心した自分は、例の追ひ求むるころを、歴史の上の不思議、古語の魅力へいよいよ専もっぱらに注ぐのだつた。

養家の父母の甘いをよいことにして、秋成はその青年期を遊蕩ゆうとうに暮した。この点に於て普通の大阪の多少富裕な家の遊び好きのぼんちに異らなかつた。当時流行の氣質本かたぎを読み、狭斜きようしゃの巷ちまたにさすらひ、すまふ、芝居の見物に身を入れたはもとよりである。そこに俳諧はいかいの余技があり、氣質本二篇を書いては居るが、これは古今を通じて多くの遊蕩児中には、まゝある文学癖へきの遺物としてのこつたに過ぎない。ところが、三十五歳、彼の遊蕩生活が終りを告げるころ、彼は突如として雨月物語を書いた。この物語によつて彼の和

漢の文学に対する通曉さ加減は、尋常一様の文学青年の造詣^{ぞうけい}ではない。押しも押されもせぬ文豪のおもかげがある。遊蕩青年からすぐこの文豪の風格を備へた著書^{そな}を生んだその間の系統の不明なのに、他の国文学者たちは一致して不思議がつて居る。殊^{こと}に彼自身、二十余歳まで眼に国語を知らず、郷党^{きやうとう}に笑はれたなどと韜晦^{とうかい}して人に語つたのが、他人の日記にもしるされてあるので、一層この間の彼の文学的内容生活は、他人の不思議さを増させた。彼はこの時までには俳諧では高井凡圭^{きけい}、儒学は五井蘭州^{ごいらんしゅう}、その他都賀庭鐘^{つがていしやう}、建部綾足^{たけべあやたり}、といふやうな学者で物語本の作者である人々についても、すこしは教へを受けたが、大たいはその造詣を自分で培^{つちか}つた。それも強^しひて精勵努力したといふわけでは無い。幼年から数奇^{すつき}な運命は彼の本来の性質の真情を求めるころを曲げゆがめ、神秘的な美欲や愛欲や智識欲の追躡^{ついしやう}といふやうな方面へ、彼の強韌な精神力を追ひ込み、その推進力によつて知らぬ間に、彼の和漢の学に対する蘊蓄^{うんちく}は深められてゐた。彼の造詣の深さを証拠立てる事は彼が三十五歳雨月物語を成すすこし前、賀茂真淵直系の国学者で幕府旗本の士である加藤宇万伎^{うまき}に贅^しを執^とつたが、この師は彼の一生のうちで、一番敬崇を運び、この師の歿^{ぼつ}するまで十一年間彼は、この師に親しみを續けて来たほどである。この宇万伎は、彼が入門するとたちまち弟子よりもむしろ友人、あるひは客員の待遇をもつて、

彼に臨み、死ぬときは、彼を尋常一様の国学者でないとして学問上の後事をさへ彼に托した。そして、この間に彼の名もそろそろ世間に聞え始めてゐた。しかし、それほどの師にすら、秋成の現実の対照に向つては、いつも絶対の感情の流露を許さぬ習癖が、うそ寒い疑心をもち〓〓師のいひし事にもしらね事どもあつて、と結局は自力に帰り、独窓のもとでこそ却て研究は徹底すると独学孤陋の徳を讃美して居る。

かういふやうに、人に屈せず、人を信ぜぬ彼であつたが、前の養母にも一度衷心感謝を披瀝したといふのは、享和元年彼は六十八歳になつたが、この年齢は大阪の歌島稻荷社の神が彼に与へた寿命の尽きる歳であつた。養母は秋成が四つの歳に疱瘡を病み、その時死ぬべき筈の命を歌島稻荷に祈つて、彼が六十八歳まで生き延びる時を期して自分の命を召します代りに、幼い命を救はれよと祈つたのであつた。その六十八歳になつても彼は死なず、祈つた養母自身がそれから二年目に死んだのが、自分の身替りのやうに有がたく思はれ、死骸に向つてしみじみ頭を下げたのだつた。それにしてもそれから今日までまた余りに生き延びた。やつぱり自分のしんにうづいてゐるまた何物かを追ひ求める執念が自分の命を死なさないのか。この妄執の念の去らぬうちは、自分はいやでもこの世に生かせられるのではあるまいか、それは、辛く怖ろしいことのやうに思はれる。また、楽し

い心丈夫な氣持もする。人間にある迷ひといふものは、寿命に對してなかなか味のある働きをしてゐるやうにも考へられる。

疑念ふかい彼はまた、若い頃からどの女を見ても醜い種が果肉の奥に隠されてゐて、自分の興を醒さめた。男を誘惑して子を生んでやらう。産んだ子を人質に、男を永く自分の便りにさしてやらう、生んだその子に向つては威張いばつて自分を扶助ふじょさしてやらう——かういふいはれの種を持たない女は一人も無からう。もつとも女自身が必ずしもさういふ魂胆を一人残らず知つてゐて男に働きかけるわけではない。たいがいの女は何にも知らずに無心に立居振舞ふのである。だがその無心の振舞ひのなかに、もう、これだけの種が仕込まれてゐるのだ。女が罪が深いとほとけも云はれたが、およそ、こんなところをさしたのではないか。自分が遇あつた女にはみなこの罌わながあつて危くてうつとりできなかつた。また、しやうばい女などはそれとはまるで違ふ種だが、やつぱりかならず持つて居る。男を迷はさず男の魂を飛とばさずに惚ほれられる女は一人も無かつた。惚れればきつと男の性根を抜き、男を腑ふ抜けにして木偶人形のやうに扱はうとする。男に自分の性根をしつかり持ち据こゑさせ乍ながら恍こう惚こつたる氣持にさして呉くれる女は一人も無かつた。さういふ女のことごとくが、男の性根のあるうちは、まるでそれをさかなに骨があるやうに氣にしてむしりにかかる。骨

がきれいにむしられて仕舞ふと安心して喰べにかかる。

酒のやうに酔はせる女はたくさんある。茶のやうに酔はせる女は一人も無い。榮西ようさい禪ぜん師しの喫茶養生記の一節を思ひ出す。「茶を飲んで一夜眠らぬも、明日身不苦」と。一夜

眠らざるも明日身苦しからぬ恋があらうか……そんなわけから、二十九のとき貰もらつた妻といふものにも何の期待も持たなかつた。年頃になつたから人並に身を固めるといふ世間並に従つたまでだ。名をお玉といつて自分とは八つ違ひだつた。大阪で育つた女だが、生れは京都の百姓の娘だから辛抱は強かつた。踏みつけられ踏みつけられたまま伸びて行くといふたちの女だつた。それを幸さいひわ、こちらはまだ遊び盛りの歳だものだから、家を外に、俳諧はいかい、戯作者げさく仲間のつきあひにうつつを抜した。たまにうちへかへつてみると、お玉の野暮やぼさ加減が氣に触つた。自分と同じ病氣なのも癪しゃくに触つた。遊びは三十を過ぎても慢性になつて続いて行くうちに、三十七の歳に養父は歿なくなる。紙屋の店を継いではじめで商売を手がけてみた。慣れぬこととてうまくゆく道理はない。その弱り目に翌年あ逢つた店の火事、次の一年間は何とか店を立て直さうとさまざまに肝胆を砕いてみたが駄目だめだつた。そしておよそ商家に育つて自分くらゐ商売に不向きな性質の人間はないと悟つた。何故なぜといふに、みすみす原価より高く利徳といふものを加へて品物を、知らん顔して人に売ると

いふことが、どうも気がひけてならなかつたからである。商品に手数料の利徳といふものをつけるのは当りまへであるには違ひなからうけれど、性分だ、その利徳はただ儲けの為に人に押し付けるやうで、客に価値を訊かれても、さそくに大きい声では返事も出来なかつた。こんな風だから三年目には家を潰して田舎落ちした。そしてあるものはたいがい食ひ尽して仕舞つたから身過ぎのため何か職業を選ばなければならなくなつた。年も四十に達したので、もうぐづぐづしては居られない、まあ、知識階級の人間には入り易さうに考へられた医学で身を立てることに決心した。

当時日本の医学界には、関東では望月三英、関西では吉益東洞、といふやうな名医が出て、共に古方の復興を唱へ、実技も大に革り、この両派の秀才が刀圭を司る要所々々へ配置されたが、一般にはまだ、行き互らない。大阪辺の町医村医は口だけは聞き覚えた東洞が唱道の「万病一毒」といふモットーを喋舌るが、実技は在来の世間医だつた。三年間つぶさに修学した秋成は、安永四年再び大阪へ戻つていよいよ医術開業。そのときにかういふことを決心した。「医者はどうせ中年の俄仕込みだから下手で人がよう用ひまい。だから、足まめにして親切で売ることしよう。しかし、いかに俗に堕ちればとて、世間医のやる幫間と骨董の取次と、金や嫁の仲人口だけは利くまい」と決心した。

足まめにやる方針は一草医秋成を流行^{はや}らせて暮しも豊^{ゆたか}になつた。医者をはじめて四年目に、家を買ひ、造作をし直して入るやうになつた。その時の費用十二貫目^{かん}を払ふことも、さう骨折らずに都合がついた。まづこの分なら見込みはついたと、せつせと働くうちに、自体が弱いからだなのでたうとう堪へ切れず残念にも医者をやめなければならなくなり、またもとの田舎^{いなか}住居^{ずまい}とはなつた。其処^{そこ}がすなはち長柄川の閑居だつた。

妻のお玉にしても、どこに妻らしいのしみがあつたらうか。自分が遊び盛りの若いうちは運びの留守番、医者になつて流行^{はや}るうちは客の取次、薬の調合、それからやつと家にゐるやうになると、病人になつた夫の介抱だ。その上七十六まで永生きされた自分の養母を引受けて面倒は見る。まるでお玉は自分の家へ女中に来たやうな女だつた。自分も六十に手が届くやうになり、田舎^{いなか}の閑居で退屈まぎれに、同棲^{どうせい}三十年近くで、はじめて妻といふ女を見直して見るのであつた。それも、左の眼は悪くなつてしまつてゐたから、右の眼一つであつた。このときお玉はもう五十一歳だつた。もともと取立てるほどのきりやうもなかつたが、それが白髪^{しろが}だらけになると、ただありきたりの老婆^{ろうば}だつた。一体が、さういふふうな女でもあるし、京都生れで、辛抱強いのに生れの性といふ考へが、こつちの頭にあるものだから、ただかういふ風に苦勞をするやうにできて来た女が老婆になつても、

根よくことと働いて居る家具のやうで、その点が、めづらしかつたのだ。この女に、女らしきなどあるとも思はないし、見つけ出すのはいや味な気がして、妻が枯木のやうな老婆になつて行くのを、却て珍重する氣持だつた。だから自分が五十九歳、妻が五十一歳の寛政四年にまづ妻の母親が死に、すぐ自分の養母が死にして、何だか氣合ひ抜けしたやうな形になつた妻のお玉が、髪をおろして尼の態になり度いと申出たときに、早速それを許したのだつた。女臭いところの嫌ひな自分の傍にある女が一層枯木の姿になるのはさつぱりするからだつた。そのとき妻は、尼らしい名をつけて呉れと頼むのですこし思案して『瑚璉』とつけてやつた。どういふわけだと妻が訊くから、これこれと呼ぶのに便利がいからだと冗談半分に教へてやると、あんまり手輕すぎると不滿さうだつたが、強ひてこゝわりもせず、やがてその名のつもりになつてゐた。

尼の形になつてからのお玉が驚かれたのは、まるで氣性の変つて仕舞つたことであつた。ばつぱつと話はする。氣の向くとき働くが、氣の向かぬときはどこまでも不精をする。世間態などちつとも構はなくなつて、つづれをぶら下げた着物でも平氣で外へ出る。そしてむやみに笑ふやうになつた。多病でよく寝込むが、それを見舞ふとあはあは笑ふ。かうなつて来ると、却て自分には彼女にいつくしみが出て来るのだ。いんぎんにまめに自分の

面倒を見た若いときの妻の親切といふものは、一つも心に留^{とど}まつて居ないのに、綻^{ほころ}びて仕舞つたやうになつた彼女が、ただわけもなくときどき自分の眼を見入るその眼を見ると、結婚して以来はじめて了解仕合つたといふ感じがするのであつた。しかも彼女は、一向もうそんなことをうれしいとも思はない無意識の状態で、自分を眺めるのだつた。

最初から、すこし、いける口の彼女であつたが、それから遠慮もなく、金があれば酒を飲み出し、京都へ移つてからは、画描きの月溪など男の酒飲み友達と組になり、豆腐ぐらゐの肴^{さかな}でわびた酒盛をしじゅうやつた。

この女も尼になつてから七年目、自分が六十六歳、彼女が五十八歳のとき死んだ。

彼女に就いては死んだ後、まだ一つ意外な思ひをさせられた。

彼女は自分の道楽を見習つて、すこしは歌めくもの、まれに短文などつづりもしたが、元来家事向きに出来て居る女の物真似、なに程の事ぞときめて、取り上げた事もなかつた。彼女も臆^{おそ}して自分には見せなかつた。ところが彼女が死に、彼女のすこしばかりの遺^{のこ}しものの破れた被^ひ布^ふ、をさながたみの菊だたうなど取片づけてゐるうちに、ふと、糸でからめた文^{ふみほうご}反古の一束を見つけ出した。読んで見ると、自分の放^{ほう}埒^{ちやう}時代にしじゅう留守をさせられた彼女の、若き妻としての外出中の夫に対する心遣ひを、こまごまと打開けたもの

や、子の無い自分が長柄川閑居時代に、ふと愛した近隣のこどもに死なれ愁^{しゅうたん}歎^{たん}の世にも憐^{あわ}れなありさまを述べたものなどであつた。書きぶりも自分のによく似た上、運ぶころも自分へ向けてゐるものばかりであつた。あの虫のやうな女に、こんな纏^{てんめん}綿^{めん}たる氣持が蟠^{わだかま}つてゐたのか。自分のやうな枯木ともなま木ともわけの判らぬ男性にやつぱり情を運ばうとしてゐたのか。さう思ふといぢらしくなつて、その文反古の上に、不覺の涙さへこぼした。しかし、再三読返してゐるうちに、自分に対して姉ぶつた物言ひや、自分を恨^{うら}まず、なんでも世の中の無常にかこつけて悟りすまさうとする貞女振りや、賢女振りが、目について来て、やつぱり彼女も世間並の女であつたかと、興^きが醒^さめたとは云ひながら、その意味からいつて、また憐れさが増し、兎^とも角^{かく}も人が編^くんで呉^くれた自分の文集『藤簍^{つづらぶみ}冊子』の末に入れてやつた。

秋成は、かういふ流浪漂泊^{るろう}の生活の中に研鑽^{けんさん}執筆してその著書は、等身の高さほどあるといはれてゐる。国文に關した研究もの、国史、支那稗史^{しなはいし}から材料を採^たつた短篇小説、校釈、対論文、戯作、和歌、紀行文、隨筆等、生涯の執筆は実に多岐^{たき}に涉^{わた}つてゐる。その著書は、煎茶道^{せんぢやどう}の祖述、漢印の考証にまで及んでゐる。しかし、これ等の仕事は、氣ままできれぎれで、物質生活を恵^はむ筈^{はず}なく、学才は人に脅威^{おそ}を与へ乍^なら、生活はだんだん孤

貧に陥つて行つた。

養母と姑^{しゅうとめ}が死んだ翌年の寛政五年、剃^{ていはつ}髪した妻瑚璉を携へて京都へ上つたときは、養母の残りものなど売り払つて、金百七両持つてゐたといふがそれもまたたく間に無くなり、それから書店の頼む僅^{わず}かばかりの古書の拔^{ばつやく}釈ものかなにかをして、十兩十五兩の札を取つて暮してゐたが、ずつと晩年は数奇^{すき}者が依頼する秋成自著の中でも有名な雨月などの謄^{とう}写^{しや}をしてその報酬で乏^{とほ}しく暮して居た。しかし、それも眼がだんだん悪くなつて出来なくなり、彼自身も『胆大小心録』で率^{そつちよく}直に述べてゐる通り、「麦くたり、やき米の湯のんだりして、をかしからぬ命を生きる——」状態になつた。

妻の瑚璉尼が死んで、全く孤独のやもめの老人となつた秋成は、一時、弟子の羽倉^{はぐらのぶよ}信美の家へ寄食してみたが窮屈で堪へられず、またよろばひ出て不自由な独居生活に返つた。

故郷なつかしく大阪に遊んだり静かな日下の正法寺へ籠^{こも}つて眼を休ませてみたりしたが老境の慰めるすもなかつた。年も丁度七十歳に達したので、前年棲^すんで知り合ひの西福寺の和尚^{おしやう}に頼んで生き葬^{とむ}らひを出して貰^{もら}ひ、墓も用意してしまつた。

秋成はそのときのことを顧みて苦笑した。さすがの癩^{かんべき}癖おやぢも我^がを折つたかと意外

に人が集つて来た。恥をかかせてやつたので怒つて居るといふ噂うわさの若い儒者まで機嫌よく挨拶あいさつに来た。役に立たないやうなものをたくさん人が呉くれた。それ等らの人々は自分をいたはつたり、力をつけたりする言葉を述べた。そして自分がしほらしく好意を悦よろこび容れる様子を示すのを期待した。自分はしまったと思つた。

自分で自分を葬ほうむる気持は、生涯何度も繰返したので、一向めづらしいことではない。今度こそ、すこし、それを大がかりに形式に現して気持を新あらたにするつもりでゐたものを、これではまるで、他人に自分を葬らせる機会を作つてやつたやうなもので、今更、取返しつかぬ失敗のやうに思はれた。で、ふしよう、ぶしよう〓〓有難う、まあ、これからことも返つた気で……といふと、その言葉に飛びついて〓〓それが宜よい、全くこれからは何もかも忘れてこどもに生れ返りなさることですぞ。と自分と同年でありながら、髪が黒く、齒が落ちず、杖つえいらず、眼自慢の老人が命令的に云つた。日頃病身の癖に、壮健な彼と同じやうに長命する秋成を腹でいまいますがつてゐる老人だつた。彼は彼に向つて日頃いたづらなる健康を罵ののし秋成に、折もあらば一撃を与へようと機会を覗うかがつてゐたのだつた。彼の言葉は〓〓この上、長生きをするなら、もちつと、おとなしくしろ。といふのも同じだつた。まはりで聞いて居た人々は手を拍うつて、さうだ、そのことそのこと、といった。

それから、知友の連中は牒^{しめ}し合したやうに、自分をこども扱ひにし、真面目^{まじめ}に相手にならなかつた。彼はその方が都合がよかつた。相手はこどもに返つた老人だといふ考への下に、愉快に自分の罵言^{ばげん}も聴き、寛容も秋成に示せた。もう誰も、秋成に向つて真理に刺されて飛上る苦痛の表情も反抗する激怒の態度も見せて呉^くれるものは無くなつた。垂れ幕のやうな、にやにやした笑ひだけが、自分の周囲を取巻いた。秋成は、的が無くなつて、空^{むな}しい矢を射る自分の疲労に堪へられなくなつた。

彼等はその上、自分に深切さへ見せ出して自分の文集を編み出した。誰にも、手をつけさせなかつた草稿を入れて置く机のわきの藤簍^{つづら}かごを搔^{かきまわ}廻したり、人のところから勝手に詠草^{えいそう}を取り寄せたりして版に彫つた。家鴨^{あひる}は醜くとも卵だけは食へると思つたのかも知れない。自分が何か註文をいひ出すとⅡⅡこどもに返つたのを忘れては困る。遊んで遊んで。と肘^{ひじ}ではねた。これらの草稿は、やつぱり、自分のかねての決心どほり、自分の枢^{ひつぎ}と一しよに寺に納めて後世を待つべきものではなかつたかしらん。人に挽^もぎとられて育つたやうな冊子でも出来て見れば、可愛^{かわ}ゆくはないことはない。それだけにまた、人に勝手にされたいまいましい氣持も、添^そふが。

夜も更け沈んだらしい。だみ声で耳の根に叩^{たた}きつけるやうな南禅寺の鐘、すこし離れて

追ひ迫る智恩院の鐘、遠くに並んできれいに澄む清水、長楽寺の鐘。寒さはいつの間に
 かすこしゆるんで、のろい檐ひさしの点滴の音が、をちこちで鳴き出した梟ふくろうの声の鳴き尻たを叩い
 てゐる。雨ではない。霽もやだ。それが戸の隙間すきまから見えぬやうに忍び込んで行燈あんどんの紙をし
 めらしてゐる。湯罐の水はすっかりなくなつて、ついでに火鉢の火の気も淡くなつてゐる。
 秋成は、尽きぬ思ひ出にすっかり焦立いらだたさせられ、納りかねる氣持に引かへ、夜半過ぎ
 の長閑な淀みよどさへ示して来たあたりの闇の静けさに、舌打ちした。ⅡⅡなにが、この俺が
 こどもに歸つた翁おきなか。求めるころも愛憎も、人に負けまい、勝負のころも、みんな生な
 殺まじろしのままで残されてゐるではないか。身体が、周囲が、もう、それをさせなくなつて
 しまつたまでだ。もしそれをさせるなら俺は右の手にも左にもちび筆を引握つて、この物
 恋ふところ、説き伏せ度い願たひを吐きに吐きつつ、しかも、未来永劫えいこ癒されぬ人の姿の
 ままで、生き延びるつもりだ。それを、さうはさせない身体よ、周囲よ、汝等なんぢらはみな人
 殺しだぞ。人殺し！ 人殺し！ と秋成は、自分の身体に向け、あたりに向け、低いけれ
 ども太くて強い調子の声を吐きかけた。そして、今更、自分の老おいを憎んだ。
 かうなつたら、やぶれ、かぶれ、生きられるだけ生きてやらう。身体が足の先きから死
 に、手の先きから死にして行かうとも、最後に残つた肋骨ろっこつ一本へでも、生きた氣込みは

残して見せようぞ——。考へがここまで来ると彼は不思議な落着きが出て来た。

暁方あけがた 近くらしいぬくい朝ぼらけを告ぐるやうな鶏とりの聲が、距離不明の辺から聞えて来た。彼はこの混濁した朝、茶を呑むことにとぼけたやうな興味を感じ出した。彼はまた湯鐘に新しく水を入れて来て火鉢の火を盛んにした。湯の沸く間に、彼は彼の唯一の愛玩あいがん品の南蛮なんばん製の茶瓶ちやびんを膝ひざに取上げて畸形きけいの両手で花にでも触れるやうに、そつと撫なでた。五官の老耄ろうもうした中で、感覚が一番確かだった。

南禅寺の本部で経行が始つた。その声を聞きながら、彼は死んだ人の名を頭の中で並べた。年代順に繰つて行つて五年前、享和元年に友だちの小沢蘆庵が七十九歳で死に、仕事敵がたきの本居宣長が七十三で死んでゐるところまで来ると彼は微笑してつぶやいた——生氣いきじ地ぢなし奴等めらだ。

十二歳年下で、六十歳の太田南畝なんぼがまだ豊鑠かくしやくとしてゐるのが氣になつた。この男には、とても生き越せさうにも思へなかつた。世の中を狂歌にかくれて、自恣じしして居るこの惻然りこうな幕府の小官吏は、秋成に対しては、真面目まじめな思ひやり深い眼でときどき見た。それで彼も、生き負けるにしろさう口惜くやしい念は起さなかつた。

茶瓶に湯が注がれて、名茶『一の森』の上じょうろう 藤とうの媚こびのやうな淡いいろ氣のある香氣

が立ちのぼった。彼は茶瓶をむづと掴んだ。茶瓶の口へ彼の尖がった内曲りの鼻を突込んだ。茶の産地の信楽の里の春のあけぼのの景色も彼の眼底に浮んだ。

その翌、文化四年七十四歳の秋成は草稿五束を古井戸に捨てた。

さうかと思ふと、その翌、文化五年には、人が、彼の書簡集『文反古』を編んで刊行するのを許して居る。そして、彼自身も、最も露骨な告白文である随筆集『胆大小心録』を完成して居る。

翌、文化六年六月、彼は、弟子の羽倉信美の家で死んだ。住み切らうと決心した南禅寺の小庵『鶉居』にも住み切れなかった。信美の家へ引取られるまでに、一時、寿蔵を営んだ西福寺へ寄寓したりなぞしても居た。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成10 岡本かの子」国書刊行会

1992（平成4）年1月23日初版第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子選集」萬里閣

1947（昭和22）年

初出：「文学界」

1935（昭和10）年8月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそつて、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：湯地光弘

2016年1月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

上田秋成の晩年

岡本かの子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>